



Title	書評 : 平野敬和『丸山眞男と橋川文三 : 戦後思想への問い』
Author(s)	盛田, 良治
Citation	日本学報. 2016, 35, p. 275-279
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55500
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評：平野敬和『丸山眞男と橋川文三：戦後思想への問い』（盛田良治）

書評：平野敬和 『丸山眞男と橋川文三：戦後思想への問い』 （教育評論社、2014年11月）

盛 田 良 治

政治学者・思想史家である丸山眞男（1914～96）は、単にその専門領域にとどまらず、広く戦後日本の人文・社会科学全般に影響を及ぼした存在であり、また戦後初期から60年安保闘争に至るまでの時期においては、アカデミズムに籠ることなく、総合雑誌での精力的な執筆活動や平和・護憲運動を中心とする実践活動に関与したことで戦後日本を代表する思想家とする評価が定着している。それゆえ、戦後日本の思想の歴史的展開を論じる際には「丸山学」と称される彼のテキストの検討がその中心に置かれなければならないと確信する人々が一定存在しているのであり、そういった人々によって書かれた「丸山眞男論」は、現在に至るまで膨大に蓄積されている¹⁾。

丸山眞男論のピークとしてはこれまで、戦後50年の1995年における『丸山眞男集』の刊行開始（97年完結）と翌96年の死去に始まり『丸山眞男座談』（98年）などが刊行された90年代後半、没後10年を経て『丸山眞男回顧談』（2006年）が刊行された2000年代半ばがあったと思われるが、没後18年を経て生誕100年を迎えた14年以降、『現代思想』誌などで特集が生まれ、彼の著作のアンソロジーが編まれたり、また本書を含めて彼の名をタイトルに冠する書籍や論文がいくつも公刊・再刊されるなど第三のブームを迎えている。さらに言えば本書刊行後の「戦後70年」である2015年、「安保関連法制」問題にみられる戦後民主主義と戦後憲法の危機ともいふべき状況に際して、かつて「民主主義の旗手」とされた丸山は、初期のファシズム論を中心に再び世の注目を集めている。

本書はこの丸山の著作とともに、彼の方法論に大きな影響を受けつつも独自の視点で日本のナショナリズム思想を論じた橋川文三（1922～83）の著作を、両者の比較・対照を通じて検討し、戦後思想における批評精神の可能性を論じたものである。先述したとおり汗牛充棟の丸山眞男論のなかでは橋川文三のテキストとの比較において論じられているという点で異色の研究と言っていいだろう²⁾。この際、著者の平野は、両者をつなぐ存在として、アジア主義を初めとして近代日本のナショナリズムと同時代のアジアとの関係を論じたことで知られる中国文学者・竹内好（1910～77）の著作も適宜参照している。

まず著者が着目するのが2人（あるいは3人）の「敗戦感覚」の違いである。1945年8月、2度目の徴兵を受け原爆被災前後の広島にいた丸山は日本によるポツダム宣言の受諾を歓迎し、これによって区切られる「戦前」と「戦後」の断絶を強調して、そこに「真の近代化の出発点」を見いだした。これに対し、同じく一兵卒として駐屯地である中国に滞在しており、対欧米戦争としての「大東亜戦争」にある種の共感を示していた竹内は、丸山のように戦後への希望を感じることができず、戦前から戦後へのスムーズな移行に対し違和感を表明する。さらに、2人よりも一世代若い大学生であり、丙種合格者として兵役を免除され、挫折感に打ちひしがれていた橋川はそれ以来、同世代の「死んだ仲間たちと生きている私との関係はこれからどうなるのだろうかという、解きたい思い」に、取り憑かれることになるのである（序章、pp.20-27）。

戦後初期の丸山は、一連の「超国家主義」論において、過去の軍国主義時代を自己批判し「戦後日本の秩序を不断に作為する近代的主体になるべく、国民精神の変革を遂げる」ことに期待するとともに、福沢諭吉・陸羯南ら明治期の思想家にみられる、ナショナリズムとデモクラシーの「健全なバランス」に「近代日本における主体意識成立の萌芽」を見いだし、そうした意識の発展を阻害した最大の要因が天皇制の存在であるとみなした（第二章）。その後、60年安保ののちアメリカ合衆国発の「近代化論」の影響が強くなってくると、これに対抗してそれまで依拠していた単線的な普遍史的發展段階を修正して「複数の近代」という歴史的視座の着想に至った。これがいわゆる「歴史の古層」論へと発展していくのだが、結局のところ「近代国民国家の枠組みを古代まで持ち込む、文化本質論」という宿命論に陥ってしまう（第四章）。

対して橋川はどうか。彼は『日本浪漫派批判序説』（1960年）において、戦時期の彼と同世代に大きな影響を与えた日本浪漫派の思想に初めて本格的なメスを入れる。そして反近代・反政治主義の形をとったその美学的イデオロギーについて、ナショナリズムがロマン主義の形態をとることで現実が「歴史として美化」されるという「ナショナリズムの原型そのものの中に潜む病理」を解明したのである（第五章）。その後さらに彼は、一連の「昭和超国家主義」論のなかで、戦時期の日本を支配していたのは丸山によって定義された明治以来の天皇制的国家主義と区別されるべき「超国家主義」であるとした。すなわち、北一輝・石原莞爾に見られる大アジア主義、安田善次郎を暗殺した朝日平吾に見られる「平等＝平均化を求めるものの欲求」が「明治国家的な近代」に対する批判であり、その点こそが問題とされなければならないとしたのである。昭和戦前期の超国家主義がある種の現状変革や救済を求めるがゆえに熱狂的支持を獲得したとする橋川の議論は、戦争体験の内在的分析を通じたその思想化という課題を追及したものであり、丸山らの先行世代や戦後世代によってほとんど省みられなかった領域に踏み込んだものであった、しかし彼のそう

した試みは「ノンポリ」的なものとして、丸山からは一蹴されることとなる。著者は、これにより「戦後日本におけるナショナリズム論の可能性の展開を狭める結果となった」としている（第六章）。

以上、本書の内容を追っていったが、まず告白しておかなければならないのは、私は丸山と橋川の著作については、現在のところ単なる一読者としての関心や知識を超えるものをもっておらず、さらに彼ら二人を論じた先行研究について十分に把握できているわけではないという点で、本書の評者としてはきわめて不適任な人物だということである。そのため、特に戦時期から1960年代にかけての丸山の思想的展開を論じた本書の前半部分が、現時点までの膨大な丸山論のなかでどのような位置を占めているのかという点を論じることが、評者の能力を超えている。その上で私自身の問題意識にもとづき、いくつか関心を引いた箇所について述べていきたい。

まず第一に、アジア（とりわけ中国）に対する丸山の眼差しが彼の著作のなかでどのような展開をみかを取り上げているのは本書の特色といえる。すなわち、戦時期の丸山は孫文の思想に「ナショナリズムとデモクラシーの結合」を見いだしたことをきっかけに、それまで「アジア的停滞」を前提としてきたアジア認識を再検討するようになり（pp.52-55）、こうした認識は50年代のナショナリズム論へと継承された。だが先述した60年代の「複数の近代化」論においても、朝鮮に対して自主的発展性のない国とする停滞論的認識が働いていたことや、帝国支配やコロニアリズムに対して明確な批判的視座を獲得するには至らなかったことなどが、公刊された数少ないテキストの中から再構成されている。こうした記述から推論できるのは、アジアに対する丸山の歴史的・同時代的認識が、同時期の日本のリベラル派の標準的なアジア観から大きく踏み出すものではなかったのではないかということである。つまり、丸山にとってのアジアは、その主要な関心の対象とはならなかったのである。したがって、著者が示唆している（pp.70-73）ように、このような丸山のアジア観を、単に彼の思想における「欠如」とみなしその「断罪」に陥るのではなく、より大きく、〈新興国ナショナリズムへの憧憬〉と〈停滞と専制のアジア〉の間で揺れ動いてきた、戦後日本のアジア観のとらえ直しという作業のなかに位置づけることで、それは初めて意味をもつものであろう。そして後述するように、戦後にとどまらず近代以降の日本（思想）におけるアジア認識の再検討という作業に着手した最初期の一人が、本書で論じられている橋川文三その人だったことはきわめて興味深い³⁾。同じように戦時期の思想に対する関心から出発した両者の間で、どうしてアジアに対する関心や認識の差が生じることになったのか。その問題は本書ではほとんど取り上げられていないが、橋川にとっては竹内好からの影響を考察する必要があるだろう。

第二に、本書が石田雄や鶴見俊輔の指摘にもとづき、丸山が自身の被爆体験をついに思想化できなかったことについて、彼にとってその経験が「戦前と戦後を断絶させて考えることのできない問題」であったと捉え、そのことが彼の「近代主義」のあり方に深く関わっていたのではないかとしている（pp.65-67）点にも注目したい。それはより大きく、戦後日本の核エネルギー体験の思想化という文脈のなかで論じられるべき問題である⁴⁾。さらに現在、脱冷戦期における東アジアの歴史認識において、広島・長崎の原爆体験をどのように位置づけるかという問題——すなわち、それが明治以来の東アジアの植民地帝国・日本の終焉を決定づけたと同時に、戦後の核開発競争と東西冷戦の開幕でもあったという二重の性格をどう考えるかという問題——は、今日においても、おそらく東アジア各国における核エネルギー管理と関わって、国境を越えたコンセンサスに達しているとはいいがたい状況にある。丸山の〈沈黙〉は、このような状況にどう関わってくるのだろうか。

以上の問題は、本書が扱う「丸山／橋川論」の範疇からは外れる課題なのであろう。しかしそれぞれ広がりと深さを持っている問題領域であるだけに、本書においてこれらがごく簡単な示唆にとどまっていることに物足りなさを感じるのは望蜀なのかも知れないが、やはり残念である⁵⁾。

さらに、そもそも本書においてなぜ「丸山と橋川（および竹内）」なのかという疑問は、評者の頭から決して離れることはなかった。確かに序章などで述べられているように、歴史認識をめぐる東アジアの論争を考えると、戦後日本においてナショナリズムや「近代性」がどのように対象化されてきたのかという問題は非常に重要な意味を持っていると考える。その際、この課題に一定の答えを与えようとした人々のなかから特に丸山と橋川を取り上げ、両者の意義と限界を明らかにするのは、著者にとっては十分必然性のあるテーマ設定だったのであろう。そして、2人の問題意識がすれ違い、実りある相互の協働関係が実現されなかったことを問題としたかったのだと考える。その場合、師弟として密接な交流や討論関係を有していた両者がなぜ相互関係を持つことが出来なかったのかという問いに対する答えが、本書の核心になってくるのではないのだろうか。しかし本書ではその点については明確な答えを提示しておらず、大いに不満が残る。その答えは、公刊されたテキストのなかから見いだすことが困難であるのならば、伝記的研究のレベルや、2人（あるいは竹内を加えた3人）よりもっと広範な当時の言説空間の磁場の探求において可能なのかも知れないとも思うが、どうだろうか。

ともあれ、本書を読んで感じるのは、丸山を主人公もしくは中心的人物としてではなく、脇役（あるいは周辺の人物）として描き出す戦後思想史がそろそろ書かれてもいいのではないかということである。本書を「丸山と（脇役としての）橋川」ではなく、少なくとも「橋川から見た丸山」としてまとめることは十分可能であっただろうと思われるが、何ら

書評：平野敬和『丸山眞男と橋川文三：戦後思想への問い』（盛田良治）

かの事情でそれが果たせなかったのは著者のために惜まれる。本書が対照としている時期以降の橋川は、1960年代以降、竹内とともに「中国の会」で活動し、丸山においては十分に追求されなかった「アジア停滞史観」の克服という課題を担っていくことになる⁶⁾。そのような問題も含め、著者の次の作品として「丸山と橋川」という枠組みを踏み越えた、新たな戦後思想史が描かれることを期待してやまない。

注

- 1) 2004年までの「丸山論」の動向については、さしあたり、田口富久治「丸山眞男をめぐる最近の研究について」『政策科学』（立命館大学）11巻3号（2004年3月）参照。
- 2) 本書に対する書評は、管見の限りで『日本思想史学』47号（2015年）掲載の河野有理によるものがある。
- 3) 竹内好・橋川文三（編）『近代日本と中国』（上下）朝日新聞社、1974年、参照。
- 4) 日本における「核エネルギー体験」の思想化という作業については、戦前期を中心とするものでは中尾麻伊香『核の誘惑——戦前日本の科学文化と「原子力ユートピア」の出現』勁草書房、2015年、戦後期では山本昭宏『核エネルギー言説の戦後史1945-1960』人文書院、2012年、酒井哲哉「核・アジア・近代の超克」『思想』1043号（2011年3月）などを参照。
- 5) このほか、1960年代末の学生叛乱において丸山が急進派学生から批判されることになったのは、彼もその一員であったアカデミズム機構の知的権威主義に対してどのような態度をとるのか、という問題に関わっているが、これについては当時の学生の一人であった山本義隆による回想『私の1960年代』金曜日、2015年、pp.116-125、が、重要な論点を提示している。昨今の「反知性主義」批判にまでつながる思想的文脈の一環として考えるべき課題であろう。
- 6) この点については、1960年代前半のアジア・フォード両財団資金受け入れ反対運動に端を発した歴史学運動のなかから、近代日本におけるアジア（史）研究の方法論を総括しようとする動きが生まれたことも注目される。当時のアンソロジーとしては、幼方直吉・遠山茂樹・田中正俊（編）『歴史学再編成の課題：歴史学の方法とアジア』御茶の水書房、1966年、などを参照。

（もりた りょうじ 大阪産業大学非常勤講師）